

女子大学

企画課管理用 社 — B — 1

推進主体	国際文化交流学部 【旧 運営委員会】
責任者	国際文化交流学部長 【旧 女子大学長】

分類	実施計画	開始年度	完了年度	将来的な継続
社 — B	「グローバルで多様性に開かれた学びの空間」を地域とつなげる	令和 4 年度	令和 9 年度	あり(予定)

① 目的・内容

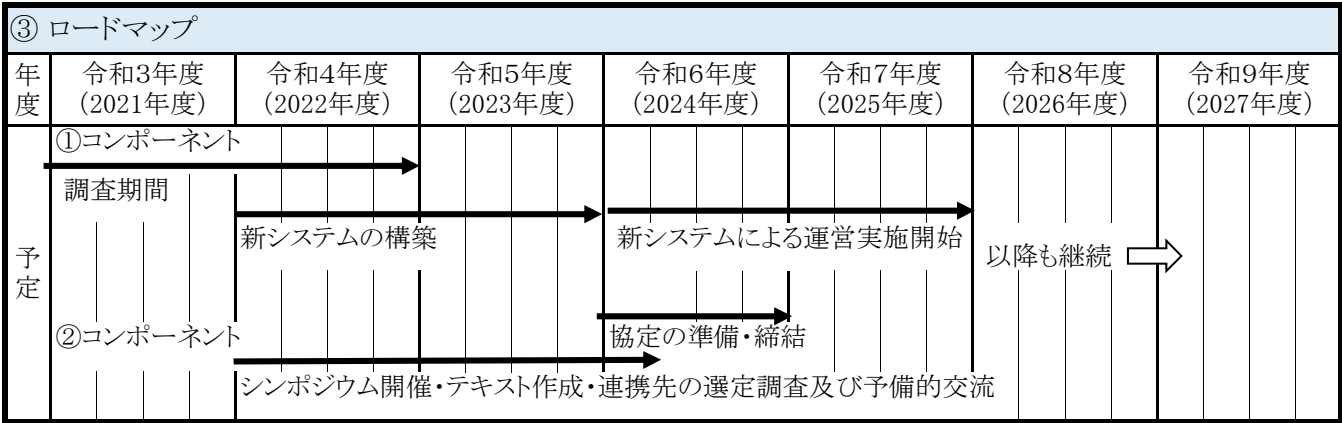
新中期計画のもとで構築していく「グローバルで多様性に開かれた学びの空間」を地域につなげる系統的な仕組みを作り、本学の教育研究の成果を地域に還元していく。本計画は新中期計画のグローバル化に関する実施計画に対して「内なるグローバル化」を志向するものであり、2つのサブコンポーネントから構成される。

①キャンパスでの活動を地域に開く活動の持続性の強化： 英国劇団によるシェイクスピア作品の上演、国内のパフォーマンス集団を招聘しての演劇祭の開催、環境教育に関する多様なプログラムの提供など、多様な文化交流・教育活動を展開してきた。これらの多様な活動が個々の教員により支えられている現状を踏まえて、より持続的な活動システムの構築を図る。

②キャンパスでの活動と地域の課題の接続： 新宿区との連携協定のもとでの諸活動を継続するとともに、新たに自治体との連携協定を締結し、地域の社会問題の解決や活性化に対する「分野横断型」アプローチの有効性を検証する。分野横断別アプローチは本学のリベラルアーツ教育・研究活動とも親和性が高いことを活用して、たとえば演劇、環境、歴史、文化財などを総合的に結合する地域の取り組みを支援する。また、その過程でシンポジウムの開催とそれをもとにしたテキストの作成をはかる。

② 到達目標(数値目標/定性目標) ※数値目標を設定できない計画は、定性目標を設定すること。

①: 新システムの構築と稼働後における適切性の検証・確認
②: 協定の締結



④ 数値目標の詳細 ※設定できない計画については記載不要。

指標の名称		指標の定義(計算式/説明)					
1	直近	令和4年度 (2022年度)	令和5年度 (2023年度)	令和6年度 (2024年度)	令和7年度 (2025年度)	令和8年度 (2026年度)	令和9年度 (2027年度)
目標							
実績							
2	直近	令和4年度 (2022年度)	令和5年度 (2023年度)	令和6年度 (2024年度)	令和7年度 (2025年度)	令和8年度 (2026年度)	令和9年度 (2027年度)
目標							
実績							

(様式2) 実施計画書 兼 報告書

⑤ 実施計画／実施報告		
年度	実施計画	実施報告／今後の課題
令和4年度 (2022年度)	令和4年度は、本学の提供しうる「分野横断型」アプローチの有効性を議論するため、本学においてシンポジウムを開催するとともに、その成果を踏まえて、本学教員の専門分野と地域活性化を関連付けるテキストの作成を行う。シンポジウムは、市町村の首長や幹部職員を招待し、本学の教員による教員の専門分野と地域活性化の関連についてのプレゼンテーションのあと、ラウンドテーブルディスカッション形式により、分野横断型アプローチの地域活性化への貢献可能性を論ずる。シンポジウムの成果等をまとめるテキストは後年度の授業科目化を想定するものとする。	令和5年1月7日にシンポジウム「学際的な「知」が拓く持続可能性～「地域」から考える～」を開催した。実施計画にあるとおり、シンポジウムでは、元総務省地域力創造審議官、元農林水産省事務次官、福島県池田町長、山梨県小菅村村長を迎え基調講演ののち、本学教員とのパネルディスカッションを実施した。地域の課題解決やSDGsの達成のためには分野を横断した統括的なアプローチが重要であること、そのような統括的なアプローチを担うべき人材育成に学際的教育がどのような貢献をを行うか等について有益な議論が展開された。テキストについては年度末の作成に向けて作業中であり、来年度開講の新設科目に適用することとしている。
令和5年度 (2023年度)	令和4年度に作成する地域の課題解決のための学際的アプローチの重要性を示すテキストを活用して新規の学際的科目を創設する。それにあわせて、同テキスト及びその他の学際的科目群をパッケージにした高大連携活動を戦略的に推進することとする。具体的には、高大連携協定校との多様な形態の協力を進めるとともに、本学での開催に加えて2地域(東北、東海を想定)において高大連携セミナーを開催する。	「多文化学際科目Ⅲ(地域活性化とSDGs)」を新たに開設し、昨年度編集した『地域活性化とSDGsへの道標』をテキストに授業を実施した。履修者は50名を越えた。コロナ禍で中断していたシェイクスピア公演を、俳優集団SPJによる舞台公演「シェイクスピアの名場面」として開催した。関東地区以外の高大連携セミナーを計画していたが、計画を変更して昨年度高大連携協定を結んだ高校との連携を深めることとした。具体的には、山脇学園高校の平和教育プログラムや、神田女学園高校の探究学習NCL(ニコル)プロジェクトなどによる連携である。
令和6年度 (2024年度)	本学の環境教育センターはこれまでエコサイエンス教室や食と農の体験教室等を開催してきたが、令和6年度は新たに「海とその環境を感じるシンポジウム」と「食とその環境を感じるシンポジウム」を開催し、本学の研究成果を広く社会に還元していく。シェイクスピア公演については、昨年度は俳優集団による開催だったが、英国劇団の再招聘の可能性も検討しながら公演を開催する予定である。地域課題と本学の学際的研究・教育をつなぐ新たな協定締結に向けて、島根県の自治体等を候補に検討を進める。	①7月に「海とその環境を感じるシンポジウム」を、11月に「食とその環境を感じるシンポジウム」を開催し、両シンポジウムともにワークショップを含むものであり、多くの参加者があった。②5月に劇団Stage Play Japanによるシェイクスピア劇「ロミオとジュリエット」を開催し、英国大使館の職員の方など多くの参加者があった。③地域課題と本学の学際的研究・教育をつなぐ新たな協定締結については候補地の検討を行った。④昨年度始めた「多文化学際科目Ⅲ(地域活性化とSDGs)」を引き続き開講するとともに、神田女学園高校の探究学習プロジェクトなど今年度も高大連携活動を実施した。また、山脇学園では中学校において平和教育の一環として出張講義を1月に2回実施することとなった。
令和7年度 (2025年度)	本実施計画については、令和7年度は次の活動を中心に実施する。 ①本学の環境教育センターはこれまでエコサイエンス教室や食と農の体験教室等を開催してきたが、今後も学術イベントを開催し、本学の研究成果を広く社会に還元していく。令和7年度には環境教育センターが中心となって、本学における食文化および食育の研究成果の社会への還元として、学内外の食の専門家をパネリストに迎え、フード・コンシャスネス教育に関するシンポジウムを開催する。そのためのシンポジウム開催費を約300万円計上した。 ②本学の課題の1つは、地域社会との連携の活性化にある。そのため、事業計画として「新たに自治体との連携協定を締結し、地域の社会問題の解決や活性化に対する『分野横断型』アプローチの有効性を検証する」ことを掲げている。これまで地域連携事業の担い手であった品川明教授が令和7年度末で退職となることから、新しい連携先の模索が必要となっている。地域課題と本学の学際的な研究・教育をつなぐための新たな協定締結に向けて、自治体についての調査と協議のための旅費を計上した。	①7月26日(土)・27日(日)の2日間にわたって、「食・食文化・食教育を感じるシンポジウム」を本学キャンパスにおいて開催した。学内外の食に関する専門家による講演、ワークショップを開催し、現在の食文化やそれに至る歴史的、文化的背景を学ぶとともに、食教育の重要性とその可能性などについても理解を深める機会となった。②地域社会との連携の活性化については、島根県大田市との協定に向け調整を進めている。

(様式2) 実施計画書 兼 報告書

<p>(2026年度)</p>	<p>本実施計画については令和8年度は次の活動を中心に実施する。</p> <p>①女子大学の環境教育センターはエコサイエンス教室や食と農の体験教室等を開催してきた。環境教育センターの事業の多くは学習院大学国際文化交流学部国際学・環境学研究所に引き継がれることとなる。今後も学術イベントを開催し、本学の研究成果を広く社会に還元していく。令和8年度には国際学・環境学研究所が中心となって、本学でのSDGsを念頭に置いた環境研究教育の成果を社会へ還元すべく、学内外の専門家、および実行の担い手の要でもある基礎自治体首長ないし関係者らをパネリストに迎え、シンポジウム及びワークショップほかを開催する。</p> <p>②令和8年度は島根県大田市との連携協定の締結を目指す。また、世界遺産石見銀山の所在地でもある島根県大田市などを軸に自治体関係者を招へいするとともに、相互交流として本学在校生及び留学生を中心とした学生有志を教員と共に現地へ派遣し、地域活性と国際文化交流のワークショップを開催する。</p>	
-----------------	---	--